

『古事記』 迹々芸命条における「天神御子」表記の役割

笠原 奈那巳

一 はじめに

『古事記』では、「天神御子」と表記される神が上巻から中巻にかけて三柱登場する。天忍穗耳命・迹々芸命・神倭伊波礼毘古命（神武天皇）である。この「天神御子」という表記は、『古事記』中巻以降、初代天皇である神武天皇にのみ使用される表記である。また、天照大神の血を引き、かつ、父系で神武天皇にまで繋がる血統の神にしか使用されることがないことは特筆すべきことである。

一方、『古事記』には、「天神之御子」という類似的表記も存在する。「天神之御子」と表記される神は、天忍穗耳命・火照命・火須勢理命・火遠理命（日子穗穗出見命）・鵜葺草葺不合命である。確かに、天照大神の血を引く神ではあるが、火照命・火須勢理命のように、神武天皇には直接繋がらない神も含まれている。つまり、「天神御子」は、「天神之御子」よりも、さらに

条件が絞られた特別な表記であると捉えるべきであろう。したがって、両表記を同等のものとして扱うべきではなく、意図的に書き分けがなされていると捉えるべきである。そして、「天神御子」という表記は、葦原中国平定のために何らかの重要な役割を担っているものと考えられる。本稿では、この「天神御子」と表記される神のうち、迹々芸命に焦点を絞り、「天神御子」の役割について考察するものである。

迹々芸命は、天忍穗耳命と高木神の娘である万幡豊秋津師比売命との子であり、建御雷神の天降りの後、天忍穗耳命の代わりに天降った神である。葦原中国に天降ってからは、木花之佐久夜毗売との間に火照命・火須勢理命・火遠理命（日子穗穗出見命）の三柱の神をもうけた。迹々芸命は、天照大神の孫であるとともに、天忍穗耳命の子に当たり、皇統に繋がる重要な立場にある神であると推察される。この神に「天神御子」という表記がなされたのは、どのような意味があるのだろうか。本稿

では、この点に注目し、『古事記』「天神御子」の位置づけを明らかにすることを目的とする。なお、本稿において取り上げる本文は、中村啓信訳注『新版 古事記現代語訳付き』に拠るものとし^(注1)、通し番号・傍線は論者が付したものである。

二 「天神之御子」と「天神御子」との相違

本節では、まず、『古事記』において、「天神之御子」と表記される箇所を取り上げ、発言者や対象となる神から、「天神之御子」にどのような役割があるのかを考察していく。「天神之御子」が表記される箇所は上巻に四例のみ見られる。なお、「天神之御子」の部分のみ()で原文を示し、傍線を付す。

①八重事代主神を徴し来て、問ひ賜ふ時に、其の父の大神に語りて言はく、「恐し。此の国は天つ神の御子(天神之御子)に奉らむ」といふすなはち其の船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打ち成して、隠りき。

②「妾は妊身めり。今産む時に臨みぬ。是の天つ神の御子(天神之御子)、私に産みまつるべくあらず。故請す」とまをす。

③「吾が妊める子、もし国つ神の子にあらば、産む時幸くあ

らじ。もし天つ神の御子(天神之御子)にあらば、幸くあらむ」とまをす。

④是に海の神の女豊玉毗売命、自ら参出でて白さく、「妾すでに妊身めり。今産む時に臨みぬ。此を念ふに、天つ神の御子(天神之御子)は、海原に生みまつるべくあらず。故参出で到りつ」とまをす。

①は葦原中国平定のため降ってきた建御雷神に大国主命が国譲りする場面である。大国主神は、国譲りの決定権は息子にあると言い、建御雷神は大国主神の子・事代主神のもとへ向かう。事代主神は父・大国主神に向かって、「恐れ多いことです。この国は天つ神の御子に献上致します」と語り、青芝垣に身を隠す^(①)。ここに見られる「天神之御子」とは、天照大神の太子、天忍穗耳命のことを指す。

②③は木花佐久夜毗売の一夜孕みの場面である。逆々芸命の子を一晚で孕んだと語る木花佐久夜毗売に対して^(②)、逆々芸命は孕んだ子は国つ神の子であると疑いをかける。それに対して木花佐久夜毗売は、「もし身籠った子が国つ神の子どもなら生むときに不幸が訪れ、天つ神の子ならば幸運が訪れることでしょう」と反論する^(③)。そして、この後、誕生したのが

木花佐久夜毗売と迺々芸命の子、火照命と火須勢理命と火遠理命（日子穗穗手見命）の三柱の神である。この場面で、「天神之御子」を指す神は、火照命・火須勢理命・火遠理命（日子穗穗手見命）であるが、「天神之御子」は話された時点で誕生していない神のことを指している。

④は豊玉毗売の出産の場面であり、豊玉毗売は身籠っている子の父である火遠理命（日子穗穗出見命）に「天つ神の御子は、海中で産んではならない」と語る。この場面での「天神之御子」とは、鵜葺草葺不合命であり、②③と同様にこの時点で誕生していない神である。

①②③④において、「天神之御子」が指す人物は、天忍穗耳命・火照命・火須勢理命・火遠理命（日子穗穗手見命）・鵜葺草葺不合命である。この中で、天皇に繋がる御子は、天忍穗耳命・火遠理命（日子穗穗手見命）・鵜葺草葺不合命の三柱の神である。倉野憲司氏は「天神之御子」について、①の場面を取り上げ、

この「天神」は「国神」に対する天神であり、その御子の意であることは、上に「我御子」とあるのによつて明らかである。ただ、その「我」は「天照大神・高木神」であるから、ここの「天神」が実質的には右の二神を指していることが知られているのである。

と述べている（注^②）。さらに、毛利正守氏は「之」という字に焦点を当て、『古事記』における「之」の用法を検討し、『古事記』の「之」が親と子の血縁的続柄を示していることを導き出した（注^③）。

以上のことから、「天神之御子」とは親子の続柄を表現するものであり、天照大神（天神）の血を引いた御子であることを主張するために使われたものであると考える。また、①②③のように、「国つ神」と対比するように表現されている点や、②③④のように、誕生していない神、すなわち名前を持たない神に対して表現されているという点から、「天神」に特異性を付加していると考えられる。

つづいて、「天神御子」と表記される箇所を検討する。『古事記』において、「天神御子」が表記される箇所は上巻に七例、中巻に一二例見られる。本節では以下、四例のみ示す。なお、「天神御子」の部分のみ（ ）で原文を示し、二重傍線を付す。

⑤故追ひ往きて、科野国の州羽海に迫め到り、殺さむとする時に、建御名方神白さく、「恐し、我をな殺しそ。此の地を除きては、他し処に行かじ。また我が父大国主神の言に違はじ。八重代主神の言に違はじ。此の葦原中国は、天つ

神の御子（天神御子）の命のまにまに献らむ」とまをす。

⑥故問ひ賜ふ時に、答へ白さく、「僕は国つ神、名は猿田毘古神なり。出で居る所以は、天つ神の御子（天神御子）天降り坐すと聞く。故御前に仕え奉らむとして、参向かへ侍り」とまをす。

⑦此の時に熊野の高倉下此は、人の名、一横刀を賣ち、天つ神の御子（天神御子）の伏せる地に到りて献るときに、

⑧天つ神の御子（天神御子）、寤め起き詔りたまはく「長寝しづるかも」とのりたまふ。

まず、「天神御子」と呼ばれる神は、天忍穗耳命・迹々芸命・神倭伊波礼毘古命の三柱の神のことを指す。

⑤は、葦原中国平定のため天降ってきた建御雷神と力比べをした建御名方神が敗北し、命乞いをする場面である。建御名方神は、「恐ろしいお方、どうか私を殺さないください。私はこの場所から他のところへ行きません。父の大国主神の御言葉に背きません。事代主神の言葉に背きません。この葦原中国は、天神のご子孫のおっしゃる通りに献上いたします」（⑤）と言う。これにより、大国主神の国譲り、すなわち葦原中国平定が完了し、建御雷神は高天原に戻っていく。「天神御子」が

指す神は、天忍穗耳命のことである

⑥は、⑤の後、迹々芸命が天降る場面である。天照大神の仰せにより、天降ることとなった迹々芸命だったが、天の道の八つ辻の分岐点に高天原と葦原中国を照らす神がいた。天照大神の命により、天宇受売神が天の道の八つ辻にいる神に何者かと問うと、「私は国つ神で猿田毘古神と申しします。ここに出ていくわけは、天神のご子孫が天降ると聞きました。それならば、先導をお伝えしたくて、お迎えに参っております」（⑥）と言う。ここでの「天神御子」は迹々芸命である。

⑦⑧は、神倭伊波礼毘古命、すなわち神武天皇の東征途中の場面である。神倭伊波礼毘古命が熊野に到着した時、大きな熊が現れ、その毒気に当てられ病んで臥せってしまう。そこに、天照大神・高木神から命を受けた高倉下が登場し（⑦）、横刀を振るうことで、神倭伊波礼毘古命は悪気から覚め起きることができた（⑧）。この場面より、『古事記』中巻へと移り、以降、「天神御子」と呼称される者は神武天皇のみとなる。

吉井巖氏は、「天神御子」と「天神之御子」は同列のものであると定義し、「天神」↓「天神御子（天神之御子）」↓「天皇」という系譜関係が成り立つことを主張している（注4）。しかし、「天神御子」と「天神之御子」を同列のものとして扱うことに

は問題がある。先述したように、「天神之御子」と表記された神で、天皇に繋がる御子は、天忍穗耳命・火遠理命（日子穗穗手見命・鵜葺草葺不合命のみである。もし、吉井氏が主張するように、「天神御子」と「天神之御子」を同列に扱うとなれば、天皇に繋がらない火照命・火須勢理命も、天神と天皇を繋ぐ役割を持つことになり、「天神」→「天神御子（天神之御子）」→「天皇」の流れに合わないと考えられる。

また、倉野氏は以下のように述べている（注5）。

申すまでもなく、天忍穗耳命は「豊葦原之千秋長五百秋之水穗国者、我御子正勝吾勝々速日天忍穗耳命之所知国」という天皇の言依さしを受けられた方であり、邇々芸尊はその天忍穗耳命の御子として、同じく天照大御神の「此豊葦原水穗国者、汝所知国」という言依さしを受けてこの国に天降られた方であり、神武天皇はその曾孫としてこの国を統治された第一代の天皇であるから、「天神御子」といふのは、所詮「天照大御神の御子で水穗の国、即ち大八島国の統治者たる方」という特殊な内容を有する熟語である。天神御子の「御子」は、血統的な御子孫といふ意ではなく、天照大御神の御霊を直接に受けてあらまれた御子といふ呪的宗教的な意に解すべきである（後略）

倉野氏は、「天神御子」と「天神之御子」は別のものだとし、「天神御子」は天照大神の血を引く者で、かつ大八島国を統治する者だと定義した。そして、「天神御子」の「御子」には、血統的な意はなく、呪的宗教的な意味があるとするので、「天神之御子」と「天神御子」の違いを明らかにした。しかし、倉野氏の「天照大御神の御霊を直接に受けてあらまれた御子」という点について、「天神御子」と称される全員に当てはまるとは考えにくい。『古事記』上巻に登場する、天忍穗耳命と邇々芸命は天照大神から直接、葦原中国平定を命じられた神である。しかし、神倭伊波礼毘古命が登場する『古事記』中巻は天照大神が直接登場することなく、天照大神と直接的な接触は認められない。また、「天神御子」の「御子」は血縁的な繋がりではない、という意見に関しても賛同できない。天照大神から神倭伊波礼毘古命まで系譜は途切れることなく続いており、「御子」には血縁的な意識があつたものと考えてよいであろう。さらに、毛利氏は、吉井氏の系譜関係をもとにしながら、吉井氏と倉野氏とは別の視点から「天神御子」という表記について論じている。「天神御子」という表記は、上巻では会話文にしか現われず、中巻になると地の文にも会話文にも現われるようになるという特徴があることから、以下のように述べている（注6）。

「天神御子」に当たる神は、高天原でも葦原中国でも上巻では「天神御子」として定位づけられることはなく、登場する神々の間で「天神御子」と呼称されるに留まり、この「天神御子」が「天神御子」として定位づけられるのは中巻に入ってからである。

毛利氏は、上巻とは高天原と葦原中国を舞台とした神が中心の巻、中巻は神との交渉を持ちながらも舞台は葦原中国に移る時代の巻であると定義した上で、上巻における「天神御子」は、「天神御子」と呼称されるものの、「天神御子」の一段階前の「天神」として定位されているという。つまり、「天神」と「御子」とを「同体」として位置付けているということであり、上巻の「天神御子」は呼称と定位づけに誤差があるということである。その後、中巻の神武天皇代になり、舞台は葦原中国へ移ることで、「天神御子」は呼称と定位づけが一致するということとだ。

以上のことから、「天神之御子」とは、天照大神、すなわち天神と血縁の関係を持つ御子のことを指し、「天神御子」とは異なるものであることが分かる。「天神御子」表記については、先行論文から、「天神」↓「天皇」の系譜関係、天照大神の血を引く大八島国を統治する者という意見については賛同できる

が、しかし、「天神御子」と「天神之御子」を同列のものとして扱うことには、やはり問題がある。
したがって、次節以降、「天神御子」と呼称される迹々芸命に焦点を絞り、考察を進めていく。

三 迹々芸命条における「天神御子」の役割

—海という世界—

『古事記』における迹々芸命を指す「天神御子」は四例確認され、本稿では天降り途中から直後の前半部と、天降り後の後半部の二つの場面に分けて考察を進めていく。本節では、前半部の二例を取り上げる。以下、本文である。

- ⑨故問ひ賜ふ時に、答え白さく、「僕は国つ神、名は媛田毗古神なり。出で居る所以は、天つ神の御子天降り坐すと聞く。故御前に仕へ奉らむとして、参向かへ侍り」とまをす。
- ⑩是に媛田毗古神を送りて、還り到るすなはち悉く鰭の広物・鰭の狭物を追ひ聚めて問ひて言はく、「汝は天つ神の御子に仕え奉らむや」といふ時に、諸の魚みな「仕へ奉らむ」と白す中に、海鼠白さず。

⑨は、逆々芸命が天降りをする場面である。天照大神の命により、天忍穗耳命の代わりに逆々芸命が天降ることとなったが、天の道の八つ辻に高天原と葦原中国を照らす神がいた。そこで、天照大神はその神のもとへ天宇受売命を遣わせた。その神は、猿田毗古神という国つ神で、天つ神の御子（天神御子）が天降ると聞いて葦原中国へ先導したいと申し出てきたのだ。この場面において、国つ神である猿田毗古神が逆々芸命を「天神御子」と呼んでいることから、この段階において、逆々芸命は天忍穗耳命から葦原中国の統治者たる資格を譲り受けていることがうかがえる。また、猿田毗古神に名を問うた神が逆々芸命ではなく、天宇受売命であることにも注目したい。

天忍穗耳命条において、建御雷神が天降りをした際に、葦原中国の統治者である大国主神が、その統治権を天つ神の御子に献上した。そして、大国主神は葦原中国の統治権を献上した際に、「僕が子等百八十神は、八重事代主神、神の御尾前と為て仕へ奉らば、違ふ神は非じ」と言っていることから、「天神御子」たる逆々芸命が葦原中国に天降ったとしても、それに反発する国つ神はいないことを示している。敵対する神はいないにもかかわらず、なぜ、逆々芸命ではなく、天宇受売命

が問いの代理人となったのだろうか。それを考察するにあたって、逆々芸命の、それぞれ祖母・父にあたる、天照大神・天忍穗耳命と、国つ神との交流を見ていきたい。

まず、天照大神について、国つ神と直接言葉を交わす描写は『古事記』においては見られない。天照大神は建御雷神の葦原中国平定以前に、天つ神である天菩比神と天若日子を遣わしているが、この二神はいつまでたっても葦原中国を平定することはなく、天照大神は鳴女を遣って、どうして葦原中国を平定しないのか、と問いを送っている。天照大神は、天つ神であったとしても、高天原から離れた時点で直接的な交流を絶っている、つまり、高天原にいる天つ神以外と直接的な交流はしないと考えられる。この天照大神という神について、金沢英之氏は、以下のように述べている（注7）。

アマテラスの担う秩序性は、ウケヒから勝ちさびを経て、スサノヲの諸々の乱行を承けたアマテラスの岩屋隠りの場面において端的に描かれる。アマテラスの不在が高天原・葦原中国に無秩序状態をもたらすことは、アマテラスが平常時の秩序を維持する存在であることを示す。

天照大神が天の岩屋に隠れてしまったとき、「高天原みな暗く、葦原中国悉く暗」くなってしまったことから、天照大神

は、高天原に居なくてはならない存在であり、葦原中国への移動が不可能であることを示している。次に、天忍穗耳命については、天照大神から天降りを命じられたものの、葦原中国の混乱を目の当たりにし、高天原へと戻り、代理として、建御雷神が平定に向かつており、国つ神たちとの交流はない。この二柱の性質から、天照大神と血縁関係を持つものは、国つ神との直接的交流をしないと推察され、したがって、その血を引く途々芸命も猿田毗古神との会話をしなかったものと考えられる。

⑩の場面は、天降りの先導をした猿田毗古神を天宇受売命（猿女君）が送り届けた後のことである。猿女君は海の魚を集め、「汝は天つ神の御子に仕へ奉らむや」と質問すると、皆、「仕へ奉らむ」と言ったが、海鼠だけはなにも言わなかった。この場面、および伊勢の海に猿田毗古神が溺れる場面は、『日本書紀』に描かれることはなく、『古事記』特有のものである。本場面において、『古事記』に伊勢の海が描かれる意味は何であらうか。伊勢の海について、西郷信綱氏は以下のように述べている^{注8}。

「神風の伊勢国は、常世浪の重浪帰する国なり。傍国の可
怜し国なり」（垂仁紀）、「神風の、伊勢の海の、大石に、
這い廻ろふ、細螺」（神武紀）、「神風の、伊勢の国は、

沖つ藻も、靡きし波に、潮気のみ、香れる国」（万、二・
一六二）等、伊勢が常に海の印象を以て語られているのを
見るべきである。

ここでは、記紀や『万葉集』が「伊勢が常に海の印象」を持っていたというところに注目したい。伊耶那岐神の言依しにおいて、天照大神が高天原、月読命が夜之食国、須佐之男命が海原、そして天照大神から述べた芸命が葦原中国を統治するように言依しをうけたように、それぞれの場所が別の世界であるという認識が、『古事記』の中にはあると考えてよい。これにおいて、鵜葺草葺不合命の誕生には、「海坂を塞ぎて」という表現があり、この部分には、「海の世界と陸の世界の境。坂道になる感じ方が裏にある」^{注9}とあることから、海と葦原中国（陸）は別世界であると考ええる。

また、神野志隆光氏は、海はワタツミノ神の国であると定義し、葦原中国とは別の世界であるとした上で、以下のように論じている^{注10}。

「入」とはその世界の領域に入ることであって、イザナミが「黄泉国」までイザナキがやってきたことに対して、愛しきあがなせの命。入り来ませる事恐し。（三七）
というのと同じく、垂直的な関係とは別である。「高天

「原」と「葦原中国」との間では、その往来は、常に「上」「降」と、垂直關係を明示していいあらわされることとひき比べてこの点に留意しておきたい（中略）トヨタマビメが自らの世界の所在を示すのに「海原」ということである。すなわち、トヨタマビメが（ワタツミノ神の国）から「参出でて」の言として、

「あはすでに妊身めり。今、産む時に臨みぬ。こをおもふに、天つ神の御子は、海原に生むべからず。かれ、参出で到れり」（一〇四）

とある。「海原」、語の意味するところとしては海の平面的な広がりであり、そこからは海の底の世界には結びつきがたいと思われる。

神野志隆光氏は、葦原中国と高天原は垂直、海は水平な關係にあると論じている。このように、海と葦原中国は別世界であることや、それぞれの世界の空間的配置の關係から考えると、逆々芸命は天照大神から葦原中国の統治者になるよう言依しをうけ、⑨で国つ神からも葦原中国の統治者であると認められている。しかし、逆々芸命は海を統治する者であるという言依しは受けておらず、海の神から新たな葦原中国の統治者であるという認識もない。葦原中国と海は、葦原中国と高天原のような

垂直的な關係ではなく、「海坂」を挟んで水平的に隣接する世界であると考えたと、葦原中国と海との關係は、どの世界よりも密接なものだと考えられる。

ここで、海を統治するように命じられた神は、須佐之男命であつたことを考慮したい。須佐之男命は、父である伊耶那岐神から海原を治めるよう命ぜられたが、亡き母を想い泣くばかりで海原を統治せず混乱を招いた。その後、高天原の混乱をも招き、天上界から追放を受けている。天照大神や月読命のように、伊耶那岐神から与えられた国の統治を行っているのであれば、同じように伊耶那岐神から海原を統治するように命じられた須佐之男命には海原を統治する能力があつたのかもしれない。しかし、『古事記』において須佐之男命が中心となる物語は海と関連するものではなく、須佐之男命の暴力性に焦点があたるものが多くみられる。この、須佐之男命の性格について、西郷信綱氏は訓読の観点から、以下のように述べている（注11）。

イザナキ・イザナミの名がイザナフに由来するのと同じで、荒れスサブ神であるからこそ建速スサノヲと読んだのだ。記紀の主だった神の名は、地名ではなく機能に基づいていると見て誤らない。その名が物語の内容と不可分に包みあう關係にあるのは、記紀の神々が説話的にかなり發展

した時期の産物に他ならぬしるしである。

また、寺川眞知夫氏は、須佐之男命の悪神性は誕生から根之堅州国の統治者になる間で成長しているとらえ、ウケヒが行われた時点での須佐之男命について、以下のように述べている（注12）。

スサノヲは統治者としては残虐な行爲をする悪神ではあったが、反逆者という意味での悪神ではなく、アマテラスがもった高天原を奪う意図をもつのではないかという疑いはこれによって晴らされた。

このことから、須佐之男命は『古事記』において、訓読の観点や物語中の行動から、悪神・荒ぶる神と認識してよいと考える。

つまり、『古事記』における須佐之男命という神は、海の統治者というよりも、その暴力性によって混乱を招く存在という認識があったと考えられる。そして、この須佐之男命は、逐々芸命の祖父にあたる神であることから、『古事記』における逐々芸命に備わっている海原を統治する能力は微弱なものであったと推察される。つまり、ここで猿女君が海の魚に対して、「汝は天つ神の御子に仕え奉らむや」と問うた理由は、海と葦原中国は別世界ではあるが、逐々芸命が葦原中国を統治する上で海

という世界が重要だったからではないだろうか。そして、猿女君の問いに対して、海鼠が返事をしなかったのは、逐々芸命の持つ海を統治する力が弱いことの表われとして捉えることができるのではないだろうか。

四 逐々芸命条における「天神御子」の役割

― 国つ神との婚姻 ―

前節⑨の考察において、天照大神の血を引く者は国つ神と会話をしないと述べたが、天降り後、逐々芸命が木花佐久夜毗売という国つ神と会話する描写が見られ、その後、二人は婚姻を結ぶこととなる。本節では、⑪⑫「天神御子」という表記を逐々芸命と国つ神の婚姻という観点から考察する。以下、本文である。

⑪「我が女二並べ立奉れる由は、石長比売を使はさば、天つ神の御子の命は雪零り風吹くとも、恒に石の如くにして、常磐に堅磐に動かず坐さむ。

⑫また木花佐久夜毗売を使はさば、木の花の栄ゆるが如く栄え坐さむとうけひて貢進りき。此の石長比売を返さしめ

て、独り木花佐久夜毗売を留めたまひつ。故、天つ神の御子の御寿は、木の花あまひのみ坐さむ」とまをす。故是を以ち今に至るまで、天皇命等の御命長くあらざるなり。

⑪⑫は、国つ神である大山津見神の台詞である。迹々芸命は葦原中国に天降り、石長比売と木花佐久夜毗売の姉妹と結婚することになった。しかし、迹々芸命は、醜い容姿の石長比売と結婚することなく、姉妹の父・大山津見神へ送り返した。このことに対して、大山津見神は「我が娘を二人一緒にさしあげましたわけは石長比売をお召しになったならば、お生まれになった天つ神の御子（天神御子）の御子孫のご寿命は、雪降り風吹くとも、久しく岩のごとく不動堅固にいらつしやることでしょう（⑪）。また木花佐久夜毗売をお召しになれば、天つ神の御子の御子孫は、桜の花の咲き栄えるよう栄えておいでになりましょうと、予め誓約を立てて差し上げました。しかしながら、石長比売をお返しに成り、独り木花佐久夜毗売をお留めになりました。このために天つ神の御子（天神御子）のご子孫の御寿命は、桜の花の盛りの間だけおありでございましょう」と申した。このことがあったために、今に及ぶまでも天皇たちの御寿命は長くないのである（⑫）。

⑪⑫から、石長比売と木花佐久夜毗売との婚姻が「天神御子」の寿命と関連することがわかる。これについて、金沢英之氏は以下のように述べている（注13）。

もしもこの「天つ神御子」がホノニニギ個人に対する単なる別称にとどまるとすれば、オホヤマツミ神の発言はホノニニギの寿命が限定されることを言っただけになり、天皇たちの寿命には関わりないはずである。しかし、直後に「故是を以て、今に至るまで、天皇命等の御命は、長くあらぬぞ」とあることは「天つ神御子」の問題が、個人としてのホノニニギにとどまらず、後の「天皇命等」の問題として引きつがれることを示すと考えられる。ここから『古事記』の「天つ神御子」を、〈個〉を超えた〈属〉を指す概念として受けとめることに導かれる。

また、西郷信綱氏は以下のように述べている（注14）。

天つ神の子である天皇は長寿であるはずなのに、そうでないのは、大山津見神のウケヒゴトによるというのである。したがってこれは、死の起源ではなく、（中略）地上に最初に降ってきた王が mortal な存在であるゆえんを語ったものである。王は個人であるとともに制度でもあるという二重人格をもつ。個人としての王は命長くないが、制度と

しての王は不死である。ここも最初の王であるホノニギの命が木の花のごともろいことをいう反面、制度としての王、つまり王権の永続性が前提されているはずで、だからそれは次段の後継ぎの子を産む話へと続くのである。真に神性なのは個々の王ではなく、王権であった。個々の王は、王権を体现する限りにおいて神性であったに他ならぬ。

金沢英之氏、西郷信綱氏はともに、この大山津見神の発言から、「天神御子」が指し示すものは逆々芸命個人ではなく、天皇という「所屬」を指し示していると論じている。逆々芸命以前に「天神御子」と表記された神である天忍穗耳命では、「天神御子」表記は三例あり、全て天忍穗耳命個人のことを指している。また、前節⑨⑩に關しても逆々芸命個人のことを指している。しかし、国つ神の娘である木花佐久夜毗売との婚姻により、「天神御子」が指し示すものに範圍の広がりが見られた。では、このように範圍を拡げる意図とはなにか。それにあたって、大山津見神の発言⑪⑫から石長比売と木花佐久夜毗売が「天神御子」の寿命に与える性質をまとめていく。

石長比売が「天神御子」の寿命に与える性質は「雪零り風吹くとも、恒に石の如くにして、常磐に堅磐に動か」ないものである。ここにみられる「常磐」「堅磐」という語には、永遠不

変という意味があり^(注15)、「天神御子」の寿命が磐のように強固に永く続くという意味がある。一方、木花佐久夜毗売では、「木の花の榮ゆるが如く榮え」るが「木の花あまひ」のように短いというものである。木花佐久夜毗売の欠点を石長比売が補填するという構図が見受けられ、大山津見神がこの姉妹を逆々芸命に送った理由は、これから先、逆々芸命の子孫が桜の花のように榮え、磐のように強く永遠に続くようにという願いがあり、それはウケヒにより確実なものになった。しかし、逆々芸命は木花佐久夜毗売としか結婚をしなかったために、逆々芸命の子孫は皆短命なものとなってしまった。つまり、大山津見神の願いが叶うことはなくなり、葦原中国が磐のように強く永遠に統治されることが不確実なものになってしまった。ここで、前節⑨で述べた、葦原中国の統治権が親から子へと移ることを考えると、これから先、逆々芸命の孫や曾孫に当たる者にも統治権は移るものであり、石長比売の婚姻により得られなかった力を補填することができると考えられる。つまり、逆々芸命と大山津見神の娘との婚姻において、「天神御子」に拡がりが見られた理由は、石長比売の「永続性」を婚姻によって補填するという『古事記』の意図があるものと考えられる。

五 おわりに

以上、逆々芸命における「天神御子」の役割について論じた。

「天神御子」を通して、天忍穗耳命から逆々芸命へと葦原中国の統治者たる力が受け継がれ、それは国つ神の意識の中に存在している。また、海と葦原中国の空間的配置から、海と葦原中国は他の国よりも密接であり、葦原中国を統治する上で海という世界は無視できないものであったと考えられる。しかし、逆々芸命の祖父にあたる須佐之男命は葦原の統治を命じられたものの、その命に背き、また、名前や物語から暴力的、かつ混乱を招く存在という認識が『古事記』内に強く出ている。それによって、逆々芸命に受け継がれた海を統治する力は微弱なものであったと推察され、猿女君の問いに対して、海鼠が返事をしなかったことも、その表われとして捉えることができるのではないだろうか。

そして、逆々芸命と木花佐久夜毗売の婚姻において、「天神御子」が示す範囲に、「個人」から「所屬」という拡がりが見られた。大山津見神は、逆々芸命の子孫に栄華と永遠を与えられるよう、ウケヒを行い、二人の娘を送ったが、逆々芸命は木花佐久夜毗売しか娶らず、結果的に血縁に永遠という性質を取

り入れることに失敗している。もし仮に、逆々芸命が木花佐久夜毗売と石長比売の二人と婚姻を結んでいたとすれば、逆々芸命「個人」に栄華と永遠が付与され、葦原中国の統治者として不滅の存在となる。しかし、逆々芸命の海を統治する力は微弱であることから、葦原中国の統治者としては不十分であったと考えられる。つまり、「天神御子」を逆々芸命で完了させないために、あえて、「永続性」を欠如させたのではないだろうか。そして、その「永続性」の欠如を補填するために、婚姻による子孫繁栄という形をとり、その婚姻の中で、逆々芸命が持たなかった海の力を、後の「天神御子」に取り入れようとしたのではないだろうか。

「天神御子」と表記される神は、天忍穗耳命・逆々芸命・神倭伊波礼毘古命（神武天皇）であるが、天照大神から神倭伊波礼毘古命までの系譜を確認すると、逆々芸命から神倭伊波礼毘古命の間には、日子穗穗出見命と鵜草草葺不合命という神が存在し、彼らには「天神御子」という表記はなされていない。ここで注目したいのは、この二柱の神が海の神の娘と婚姻し、神倭伊波礼毘古命へと血統を繋いでいるという点である。第三節で述べた海の力の欠落と、第四節で述べた「永続性」を補填するための婚姻という、逆々芸命における「天神御子」の問題点

が、「天神御子」と表記されることのない二柱の神の物語中で補填されているのではないか。そして、迺々芸命に欠如していた力を持つ、初代天皇であり、また、最後の「天神御子」である神倭伊波礼毘古命という完璧な葦原中国の統治者という存在が誕生したと考える。

つまり、迺々芸命条における「天神御子」表記には、迺々芸命は「天神御子」として不十分な存在ではあるが、後に完璧な「天神御子」が存在するということを予祝する役割があると考えられるのである（注¹⁶）。

注1 中村啓信『新版 古事記現代語訳付き』（KADOKAWA・二〇〇八年）。なお底本は、真福寺本の賢瑜筆本によるが、本稿において考察する「天神御子」「天神之御子」の表記については、諸本間において異同はない。

2 倉野憲司『古事記全注釈 第二巻上巻編（上）』（三省堂・一九七四年）

3 毛利正守「古事記に於ける『天神』と『天神御子』」『国語国文』第五十九卷三号（一九九〇年三月）

4 吉井巖「古事記の作品的性格について」『国文学 解釈と教材の研究』第二九卷一一号（一九八四年九月）

5 注2に同じ

6 注3に同じ

7 金沢英之「オシホミミの位置—ウケヒによる出生をめぐって—」『国語と国文学』第八十三卷六号（二〇〇六年六月）

8 西郷信綱『古事記註釈 第二巻』（平凡社・一九七五年）

9 中村啓信『新版 古事記現代語訳付き』（KADOKAWA・二〇〇八年）

10 神野志隆光『古事記の世界観』（吉川弘文館・一九八六年）

11 西郷信綱『古事記註釈 第一巻』（平凡社・一九七五年）

12 寺川眞知夫「スサノヲの神性—悪神と善神—」出雲路修・田村憲治編『説話論集 第十六集 説話の中の善悪諸神』（清文堂出版・二〇〇七年）

13 金沢英之「『古事記』の『天つ神御子』—アマテラスの言依しとの関係を中心に—」稲岡耕二・神野志隆光編『萬葉集研究』第三十集（塙書房・二〇〇九年）

14 注11に同じ

15 注11前掲書の「語釈」を論者がまとめたものである。

16 なお、他に「天神御子」と表記される天忍穗耳命と神倭伊波礼毘古御子命に関しては、二〇二〇年度に提出した卒

業論文において詳細に論じたところであるが、紙幅の関係上、要点のみ、以下に箇条書きで記しておく。

(1) 天忍穂耳命条における「天神御子」の役割とは、国つ神の意識の中にある畏怖の対象を、天照大神から天忍穂耳命へと推移させる目的があつたと考えられる。

(2) 『古事記』中巻に入り、神倭伊波礼毘古命は兄である五瀬命と共に、日向から東征を始めるが、熊野に入る手前で五瀬命は命を落としてしまう。その後、神倭伊波礼毘古命が「天神御子」と表記されていることから、五瀬命の死をもつて、神倭伊波礼毘古命は「天神御子」となったことが分かる。そして、熊野では、高倉下の夢に、天照大神・高木神・建御雷神という、天忍穂耳命の天降りを連想させる神々たちを登場させることで、神倭伊波礼毘古命こそが正統な葦原中国の統治者であることを意識づけているものと考えられる。

以上のことから、『古事記』における「天神御子」の役割とは、完璧な葦原中国の統治者を作り上げるために必要な表現であったと考えられるのである。

付記 本稿は、ノートルダム清心女子大学に提出した二〇二〇

年度卒業論文の一部を加筆・訂正したものである。

(かさはら ななみ／二〇二〇年度卒業生)

キーワード＝古事記 天神御子 迹々芸命